

本指導案は、「2018年度 横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」において
横浜国立大学の教員と横浜美術館が協働で作成しました。

横浜美術館コレクションを活用した鑑賞授業

美術科学習指導案

1. 題材名 **「変わりゆく形とわたし」 ～彫刻の内側と外側からのエネルギーを感じ取って～**

2. 題材作品 ハンス（ジャン）・アルプ 《成長》
 1938年（1983年の鋳造）
 ブロンズ
 高さ 82.3× 幅 23.0× 奥行き 31.0cm
 横浜美術館蔵

3. 実施学年 第 2,3 学年

4. 学習指導要領との関連 B鑑賞（1）ア 【 H29 学習指導要領 】 B鑑賞（1）ア（ア）

5. 本題材について

本題材は、特別の教科道徳との関連を図り実施するものである。生徒たち中学生は自我の意識が強まる時期であり、希望とともに迷いや不安や怒りなど複雑な感情を抱く発達段階にある。特別の教科道徳の内容項目A-（4）では、困難や失敗を乗り越えて自らの未来に向かっていくことについて考える。それを受けて本題材では、アルプの《成長》を鑑賞して作品のよさや面白さに気づき味わうことにより、生徒自身の変容すなわち成長を自覚し思いをはせる（メタ認知する）ことにつなげたい。

アルプは自らの作品に対して、形が変容する瞬間を「コンクリーション（凝固）」したと語っている。ならば本題材で取り上げる《成長》は、とどまった形をした彫刻であるにもかかわらず、まだ変容の途中の形であるとも言える。《成長》の彫刻作品としての魅力に迫りながら、変容していく形としてとらえることで、生徒が自らの変容や成長をメタ認知して、自らの感じ方や考え方を生み出していくことを目指す。

*本題材のキーワード：

彫刻の量感、動勢、均衡

（彫刻に内在する）内側からのエネルギー、外側からのエネルギー

メタモルフォーシス(変容)

コンクリーション（凝固）

生徒自身のメタ認知

6. 題材目標

作品の形に内在するエネルギーを感じ取り、変容する形としてとらえることで、自分自身の変容や成長と重ね合わせながら、作品に対する自分なりの意味や価値を見いだす。

7. 題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
自らの視覚や触覚などの感覚を働かせて作品のエネルギーを感じ取ろうとして、作品に対する自分なりの意味や価値を見いだそうとしている。	作品の形に内在するエネルギーを感じ取りながら、変容する形としての作品をとらえて、自分なりの意味や価値を見だし、見方を深めている。

8. 準備

指導者：作品図版（多方向からのもの）、タブレット端末（20台）、ワークシート、粘土

生徒：筆記用具、手拭き

9. 授業展開（全1時間）

1	学習活動	指導内容および留意点
導入	彫刻(立体)としての形をつかむために、自分なりの発見ができるように《成長》をよく見る。	
5分	①アルプの《成長》の図版やタブレット端末の画像をよく見て、彫刻としての形を感じ取りながら、気づいたことや初見の感想を述べる。	<ul style="list-style-type: none"> ・教室に掲示する図版は、実物大のものを用意する。 ・タブレット端末の写真のスライドショーを利用して、作品を多方面からとらえられるようにする。 ・「^{マッサ}量感」「^{ムーブメント}動き」「^{バランス}均衡」などの彫刻の造形的な要素に注目させる。 ・作品のタイトルは、伝えない。
展開 (1)	粘土を変化していく自分自身の「素」に見立て、内側から外側からのエネルギーを感じ取って、思いのまま即興的に形を表	
10分	<p>② 掌にのせた粘土を、変化していく自分自身の「素」とみたと、それにエネルギーが加わったらどのように形が変化するかを考えて形を表す。</p> <p>③ 出来上がった作品を机の上に自立させてみて班で見合い、どのようなエネルギーが加わり、どう形が変化したかについてグループや学級で話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・丸める、握る、伸ばす、引っ張る、ねじる、ひねる・・・など、粘土の可塑性を生かして自由に表現させる。 ・粘土に力加わるエネルギーは、形に対してどのようなものなのか（大きさ、方向など）をイメージし、「^{マッサ}量感」「^{ムーブメント}動き」をつかませる。 ・自立させて立たせることで、彫刻の「^{バランス}均衡」を意識させる。

		<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギーの大きさや向かう方向について感じたこと、またなぜそう思ったかをできるだけたくさん話し合わせる。
展開 (2)	《成長》を自分自身と見立てながらよく見て、彫刻の内外から発するエネルギーを感じ取り、それにより変容していく形を想像する。	
30分	<p>④彫刻の内外から発するエネルギーを感じ取って、それがどのくらいの大きさか、どの方向に向かっているか考え、ワークシートの作品の図に矢印で表す。</p> <p>⑤各自が感じ取ったエネルギーについて、グループや学級全体で話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土の体験を踏まえて、彫刻の造形的な要素を感じ取ることで、形の内側から発するエネルギーと外側から受けているエネルギーを感じ取らせる。 ・多様な考えを認め合う雰囲気大切に。 ・「この彫刻は、完成形なのか？」という問いを投げかける。
	<p>⑥この彫刻にさらにエネルギーが加わったらどのように形が変化するかを想像してワークシートに表す。</p> <p>⑦どのようなエネルギーによって、どのように形が変化するか、イメージしたことをグループや学級で話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようなエネルギーによって、どのように形が変化するのかをイメージさせる。 ・どのようなエネルギーによって、どのように形が変化したのか、なぜそう思ったかをできるだけたくさん発言させる。
まとめ 5分	本時の学習をふりかえり、変容することを自分自身に置き換えて考えてみる。	
	<p>⑧変化した形を想像して感じ取ったことをふまえて、作品《成長》を今一度じっくり見直してみ、「変わっていく」ことについて自分の考えをワークシートに書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ここで作品のタイトルを明かす。 ・作品と自分の粘土の形の変化と、自分自身の変化について重ね合わせて、心の中で見つめさせる。

10. 指導案作成者からのメッセージ

本題材は、特別の教科道徳と教科連携を想定した授業になっています。特別の教科道徳で、困難や失敗を乗り越え、自らの力で前進していくことを学んだ後に、本題材では作品との対話を通して、作品のエネルギーや作品自体の変容を感じ取り、自分自身と重ね合わせることで、作品理解を深めていくことを目指しました。

実際の作品がない状態での彫刻作品の鑑賞授業で悩まれる先生方も多いかと思いますが、今回、タブレットと粘土を使うことで解消できたのではないのでしょうか？これをきっかけに彫刻作品の鑑賞方法の幅を広げていただけたら幸いです。

11. 参考文献

- ・『横浜美術館コレクション選』 横浜美術館、2014年
- ・『ハンス・アルプ展』カタログ 神奈川県立美術館、2005年

- ・『アルプ展』カタログ 横浜市民ギャラリー、1986年
- ・The Art Institute of Chicago ホームページ

(指導案制作者：横浜市立中学校教諭 山田香織／千葉郁子／黒田唯)

授業者用参考資料

■作品・作家について

ハンス (ジャン) ・アルプ [Hans (Jean) ARP, 1886-1966]

《成長》

1938年 (1983年の鋳造)

ブロンズ

高さ 82.3 × 幅 23.0 × 奥行 31.0cm

横浜美術館蔵

生命のエネルギーが具体的な形を伴って現れたような作品《成長》。滑らかな表面とねじれながら上昇していくような姿に、生きているもの、たとえば水を与えられ太陽の恩恵を受けた植物が、ぐんぐん伸びていくような動きを重ねあわせることができるかもしれません。ぐるりと周囲をめぐる鑑賞していくと、視点の変化にともない、形状が変容していくので、自然の生命の原理ともいえる生成の瞬間をよりいっそう感じられます。作品の素材となっているブロンズは、鋳造彫刻においてよく用いられる、銅と錫（すず）などの合金です。

ハンス (ジャン) ・アルプは、彫刻家、画家であり、詩人としても活動しました。ストラスブール (現・フランス、当時・ドイツ領) に生まれ、1912年頃、表現主義を展開した「青騎士」グループと交流し、パリでピカソやモディリアーニらと知り合います。この頃、卵形と曲線を生かした独特のレリーフ制作を始めています。その後ダダの創設に参加し、さらにシュルレアリスムの芸術家たちとも交流するなど、同時代の様々な芸術から影響を受けました。第二次大戦が勃発する前年の1938年に制作された本作には、アルプが一貫して追求した「生成と変容のフォルム」が明確に表現されています。

(横浜美術館 教育普及グループ)